

牛久：学校周辺に見る自然

第26号 ひたち野西近隣公園(ひたち野うしく小)

2011年7月18日発行

＜ 夏の水辺公園で生きもの探検！ ～その4. エゴノキをめぐる虫たち ＞

7/6、ひたち野うしく小3年生の水辺公園観察の続き。今回はエゴノキの冬芽につくられる虫こぶ、エゴノネコアシ(エゴの猫足)とそこに集まる虫たちを中心に、この1本の木をたよりに生きる虫たちのお話をしましょう。



左の方に3個ついているバナナの房のようなものが、アブラムシによる虫こぶ、エゴノネコアシ。
右の方にぶら下がっているのはエゴノキの若い果実(6/29)。

エゴノキはとっくに花の時期を終え、淡緑色の若い果実をたくさんつけていました。そしてよく見ると、枝の先の方に何やらバナナの房のような形をしたものがついています。探してみると、結構たくさんありましたね。これは「エゴノネコアシ」といって、冬芽にアブラムシが寄生してできる虫こぶです。本来なら茎や葉になるはずの部分が、こんなバナナの房のような姿になってしまったのです。左の写真のように、そのつけ根に不完全な葉がついているものもあります。



＜ちょっと難しい話ですが…＞ 冬芽に産みつけられた卵から孵化する幼虫はすべてメスで、成長すると交尾せずに卵をつくります。卵はメスの体内で孵化し幼虫となって生まれますが、その幼虫はすべて親と同じ遺伝子をもったクローンのメスです。こうしてメスだけで増えていき、虫こぶも大きくなります。アブラムシはこの虫こぶのおかげで天敵に食べられず、エゴノキの汁をたっぷり吸うことができます。中には虫こぶに産卵管をさして幼虫に寄生するハチもいるようで、全く完全なわけではありませんが、すみかとエサの両方を用意してもらったようなものですね。7～8月、夏になり木よりも草のほうが栄養状態がよくなってくると、虫こぶの先端が開いて、翅のある成虫がイネ科のアシボソに飛んでいき夏を越します。秋になると、オスも産まれて交尾し、メスはエゴノキに戻って冬芽に産卵し、卵で越冬します。



左は3年生が虫こぶの一つを開いてみたところ。まだ若いアブラムシから、翅のあるものまでいろいろ。

右は外にはい出てきたのか、もともと虫こぶに入れず外で繁殖したのか「バナナの房」のまん中に集まっていた。



アブラムシがいると、テントウムシもやってきます。エサとして食べるためです。虫こぶにひそんで待ちぶせ？しているものや幼虫もいましたね。

アブラムシのおしりから出る甘い汁をもらいにくる昆虫もいます。そう、アリです。アブラムシが食べられると困るので、おどかしたり攻撃したりしてテントウムシを追い払います。写真のアリは虫こぶのまん中にひそんでいましたが、アブラムシとテントウムシ、どちらを待っていたのでしょうか？それとも、ただ休んでいただけかな？



上：虫こぶのまん中でアブラムシを待つ？ナミテントウ(6/29)と、エサを探し歩きまわるナミテントウの幼虫(右下)。

下左：別の虫こぶのまん中には大きなアリがいた(6/29)。

下右：葉にできたイボのような虫こぶ。

別の枝では、葉にイボ状の虫こぶが出来ているものもありました。「うどんげの花」とも呼ばれる



クサカゲロウの卵がついた葉もありました。また、公園内の別のエゴノキには、葉を巻いてその中に卵を産むエゴツルクビオトシブミの「ゆりかご」もついていました。「ゆりかご」は切り落とさず、孵化した幼虫は巻かれた葉を食べて育ち蛹になります。そして羽化すると穴を開けて出てくるのです。

↑「うどんげの花」、クサカゲロウの卵。

エゴツルクビオトシブミの「ゆりかご」。→



おまけに、満開の^{まんかい}エゴノキとその花蜜を吸いに^{みつ}来ていたマルハナバチです。



満開のエゴノキ 2008. 5. 21 牛久自然観察の森



エゴノキの花蜜を吸いにきたクロマルハナバチ（よく似たコマルハナバチのメスの可能性もあり）。
左の花には先客（甲虫類）がいましたが、おかまいなしにもぐっていきました。でも、甲虫も逃げませんでした。よほど魅力的な蜜だったのでしょう。

2008. 5. 21 牛久自然観察の森

エゴノキは、「^{くるいざき}狂い咲き」といって秋や冬、季節外れに少しの花を咲かせることが結構あります。

虫たちの活動が活発でない時期だからか、それで実を实らせることはないようです。

さて、1本のエゴノキに集まる虫たちの一部を紹介してきましたが、いかがでしたでしょうか？

【理科支援員 宮内】



エゴノキの狂い咲き(左)と蜜を吸いにきたホソヒラタアブ(右)
2010. 11. 22 ひたち野西近隣公園